

# 保育園児の保護者と保育者の 「子どもの食を支える力」に関する質的研究

久保 麻季 (指導：酒井 治子)

Parents and Nursery Teacher's Desired "Power to Support Children's Food"  
: A Qualitative Study  
By Maki Kubo

## 1. はじめに

子どもが豊かな食の経験を積み重ねるためには、家庭と保育所の双方での支援が不可欠である。家庭の保護者に対する支援の内容や方法を選定する上で、保護者がどのような「子どもの食を支える力」を持つべきであるのか検討する必要がある。

一方、保育所では、それぞれの専門職種の専門性と、保育所の職員としての共通性の両面からどのような「子どもの食を支える力」を持つべきであるのかを明らかにする必要がある。そこで、本研究では対象者の「なまの声」からニーズを把握したいと考え、グループインタビュー法を用いて次の第二段階から質的研究をすすめた。研究Ⅰでは、父親・母親双方から「子どもの食を支える力」を検討した。研究Ⅱでは、施設長、主任、保育士、栄養士それぞれの専門職種から「子どもの食を支える力」を検討した。

## 2. 保育園児の保護者を対象とした「子どもの食を支える力」に関する質的研究(研究Ⅰ)

### 1. 目的

子どもの食を豊かにするためには、家庭と保育所の連携が大切である。保育所において保護者に対する食を通した子育て支援も欠かすことができない重要な支援となっている。

保育所における子育て支援の具体的な取り組み例として、クラスだよりや保護者会で保護者に対して食事の話をするなどがあげられる。

家庭での保護者と子どもの食のかかわりの実態をみてみると、母親を対象とした先行研究が多くなされている。一方、父親に関しては、父親向け

の子育て支援プログラムが少ないことや、家庭での子どもとの関わりが少ないことなどが先行研究で明らかとなっている。

保育所において、子育て支援をするにあたって、父親がどのような支援を求めているのか、父親と母親は同じ支援を求めているのか明らかにされていない。父親・母親それぞれの特性および個人の関心に応じた食に関する支援が望まれると考える。

そこで研究Ⅰの目的は、父親・母親それぞれが家庭での食育や子どもの食を支える力をどのようにとらえているかなどを抽出することである。さらにその結果を保育所の食を通した子育て支援のニーズアセスメントの指標につなげていきたい。

### 2. 方法

平成29年2月～3月にかけて、東京都2園、神奈川県2園の計4園の保育園に通う子どもの保護者を対象にグループインタビューを実施した。インタビューは約1時間半、各園の教室で行った。インタビューの内容は、①家庭でどのような食育をしていますか、②保育園での食育や食に関する支援を知っていますか、③子どもの食を支えるために、どんな力(態度・スキル・行動・食事観など)があったらいいとお考えですか、の3つに設定した。

インタビュー後、ICレコーダーから逐語録を作成し、KJ法により重要アイテムを抽出し、重要アイテムを類似性や相違性を確認しながらサブカテゴリーを作成した。同様に、サブカテゴリーの類似性や相違性を確認して重要カテゴリーを作成した。妥当性や信頼性を高めるために、これら

一連の作業は筆者と指導教員、助教の3人で行った。

### 3. 結果

各園の参加人数は、A園では6名（父親3人、母親3人）、B園では11名（父親4人、母親7人）、C園では7名（父親2人、母親5人）、D園では9名（父親3人、母親6人）であった。

発言数は、父親延べ222件、母親延べ500件であった。父親・母親ともに、めざす子ども像、家庭での食育、保育園への想い、子どもの食を支える力の4つの特大カテゴリーに分類できた。

父親・母親ともにめざす子ども像があげられ、それに向けて、家庭での食育が実施されていた。家庭での食育については、食べる場面と作る場面に分類され、一緒にご飯を食べていることや親子での食事づくりなど、家庭での様々な食育が抽出できた。父親・母親ともに食べる場面より、作る場面の発言が多く抽出できた。保育園への想いでは、子どもの活動と環境構成についての発言であった。具体的に、子どもの活動では、子どもから園での活動を聞いていることや園での子どもの様子を把握している発言であった。環境構成では、給食に高い評価をしていた。保護者支援についての発言もみられ、家庭と保育園が支援を通してつながっていることも明らかとなった。

子どもの食を支える力では、母親の特徴として、子どもと関わる際、安定した精神的基盤を持つ力が抽出でき、母親の内在的なものを引き出せた。また、家庭での食育を通して子どもに学んでほしい食育のねらいを明確化する力も示された。父親の特徴は、父親同士や地域のつながり持ちながら、野菜づくりやアウトドアを子どもと体験する力が抽出された。

### 4. 考察

家庭での食育において、食べる場面より、作る場面の発言が多かったのは、作る場面の方が印象に残りやすいからであろう。食べる場面では、家族で一緒にご飯を食べる「共食」があげられた。一方で、父親だけで食べている「孤食」も明らかとなった。母親の調理に関する先行研究は多くなされているが、食卓での食べる場面の先行研究はあまりみられない。今後、家庭での食べる場面も

検討していく必要があると考える。

母親の「子どもの食を支える力」では、母親からは子どもと関わる際、安定した精神的基盤を持つ力が多くあげられた。本研究の対象者である母親は、フルタイムでの勤務が多く、セルフコントロールは精神面だけでなく、生活面に関係してくると考える。先行研究では、母親への子育て支援の課題として、「母親の育児に対するネガティブな感情へのサポート」の重要性がいられている。本研究の母親も、子どもと食の関わりを十分に持てていないと感じ、そのことへ罪悪感を抱いていた。保育園への発言の中でも、母親のみで先生への相談・助言についてあったことから、相談したり、アドバイスをもらったりすることは母親にとって、とても安心できる一つの支援だと考えられる。つまり、母親へは子ども食に関する具体的な知識やスキルとともに、精神面へのサポートがとても重要であると考えられる。また、母親からは食事のマナーを教えたいことや食のありがたさを教えたいこと、食文化を伝えたいことがあげられた。普段から子どもの食に関わっている母親は、家庭での食育を通して子どもに学んでほしい食育のねらいを明確化させることで、子どもの食への関わり方を見つけていると考える。

一方、父親では「子どもの食を支える力」として、野菜づくりやアウトドアに関しての発言が多かった。父親は育児をレジャーや父親としてのアイデンティティの確認などと捉えていることが明らかとなっている。父親はキャンプや釣りといった自然での活動を通じた食への取り組みから、子どもと食のつながりを創意工夫し、自然のありがたさの学びとして、遊びの中に見出していると考えられる。

子育てにおいて、先行研究では、本来自分でやるべきことではない不慣れな育児は、やらされ意識のジレンマやストレスを父親自身が発散できる場、相談する場所が少なく、育児する父親を孤立させていると指摘し、そうしないために、先輩パパや思いを共有できるパパ友達との交流の場を提供し、多くの意見を交わし孤独感を軽減していくことが大切であり、現在の子育てに即した新たな父親モデルを模索する機会を提供する必要がある

といわれている。本研究の結果からも、父親は父親同士や地域のつながりを求めていることが明らかとなっており、先輩パパやパパ友達と関わりが持てる機会が必要であると考えられる。

### 3. 保育者を対象とした「子どもの食を支える力」に関する質的研究（研究Ⅱ）

#### 1. 目的

保育所では、子どもの食の経験を豊かにするため、施設長や主任、保育士、栄養士など様々な専門職種が関わり、食育が展開されている。『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』には、「「食育」の実施に当たっては、家庭や地域社会と連携を図り、保護者の協力のもと、保育士、調理員、栄養士、看護師などの全職員がその有する専門性を活かしながら、共に進めることが重要である」と記載されている。全職員が連携し、そして専門職を活かしながら食育を行っていく必要がある。

一方、給食に関しても、「児童福祉施設における食事の提供に関する援助及び指導について（平成27年3月）」において、「給食の適正な運営のため、定期的に施設長を含む関係職員による情報の共有を図るとともに、常に施設全体で、食事計画・評価を通して給食運営の改善に努めるよう、援助及び指導を行うこと。」と述べられている。つまり、食育のみならず給食においても施設全体で子どもの食を支えていくことが必要であるとされている。

しかしながら、今まで、保育所での子どもの食を支えるためにそれぞれの職種がどのような力を育んでいかななくてはならないのか、そうした視点での先行研究はほとんどない。

そこで、研究Ⅱの目的は、保育所や認定こども園において保育者の「子どもの食を支える力」の特徴を抽出することとした。

#### 2. 方法

参加者の募集は、平成29年5月に日本保育協会、東京都民間保育園協会を通じて行った。前者は刊行物に募集要項を記載して募り、後者はメールで配信をした。募集の際には、日本保育協会の研究の一環であることを明記し、倫理的配慮事項も記

載した。第一回目は、平成29年6月3日（土）に主に施設長、主任を対象に募集を行い、第二回目は、7月15日（土）に保育士、保育教諭、栄養士、調理員、看護師を対象に募集を行った。インタビューの内容は、①子ども達は各園でどのような食の経験をしていますか？②その経験を通して、どのような子どもを育みたいとお考えですか？③子ども達がそのような食の経験を積むためにどんな保育者の専門性があればよいでしょうか？の3つとし順不同に自由に発言をしてもらった。なお、分析方法は研究Ⅰと同様に行った。

#### 3. 結果

グループインタビューの参加者は、第1回では、6グループ（5名～7名）の合計38名で実施した。参加者は、施設長12名、副園長1名、主任11名、保育士10名、栄養士3名、自治体職員1名であった。第2回では、8グループ（6名～8名）の合計59名が参加した。職種は、主任1名、保育士14名、保育教諭1名、栄養士35名、調理員6名、看護師2名であった。

2日間の研修の参加人数は合わせて96人、抽出された重要アイテムは2768件であった。各職種では、施設長のべ464件（12人）、主任のべ202件（13人）、保育士のべ1009件（27人）、栄養士のべ1093件（44人）であった。

全職種に共通して、アレルギーの子どもに対応できる力や子どもへの食事提供の方法を考える力があげられた。各職種別にみると、施設長では、仕組みづくりや施設づくりなどの発言が多く、リーダーシップに関する力が子どもの食を支える力のためにも必要であると認識した発言がみられた。つまり施設長からは、園のマネージメント力が引き出された。主任では、施設長同様、園のマネージメント力のほかに、保育士や栄養士を教育する力が引き出された。保育士は、子どもに関する発言が多く抽出できた。また、保護者支援においても多くの発言がみられた。特に、保護者の悩みや不安を聞き、フォローしていることが明らかとなった。栄養士は、調理に関すること、保育所保育指針や幼児教育への理解に関する発言が特徴的であった。保育士、栄養士に共通して連携についての発言がみられ、「子どもの食」をテーマに

互いの考えを尊重し、連携しながら、同じ子どもの育ちを目指した食育を実践する力や、そのための専門性を向上する力が抽出された。

#### 4. 考察

施設長として、職員の必要としていることを把握し、園外で得られた情報を整理し、選択し、職員の学びとなる研修を開くことが必要であると考え。また、その職員の学びのみならず、職員の探求心を育てることも重要であろう。施設長からは保育士育成についての発言はみられたが、職員の育成についての発言はみられなかった。栄養士も個人の資質の発言は、ほかの職種と比べ低かったのも関係していると考え。このことから、施設長として、保育のみならず、食を含めた職員育成する力も必要であると考え。

主任は、施設長と保育士の両面をそなえており、後輩育成を行っている役割を認識していることが特徴的であった。このため、園外の地域、園レベルの施策や園内の情報の伝達の力が必要であると考え。

保育士は子どもの関わりへの発言が多くあげられた。めざす子ども像では、子どもの食事を楽しむ姿への信念を形成していることが明らかとなった。先行研究では、保育士は意識的に子どもが楽しく、意欲的に食べられるよう、集団で食べる保育施設だからこその特性を活かした働きかけを行おうと考えていることを明らかとしている。本研究の結果からも、めざす子ども像として楽しく食べる子どもへの想いが抽出され、また、給食場面の子どもとの関わりで食事の雰囲気づくりにおいて「楽しんで食事ができる雰囲気をつくる」との発言から、同様な傾向が見られた。また、保育士からは保護者支援についても多く抽出できた。先行研究では、保育所を利用する保護者がいかなる条件であれば保育士に自らの悩み相談するのかを明らかにしており、その一つに日常的な保護者へのアプローチをあげている。平成27年度乳幼児栄養調査によると約8割の保護者が子どもの食事について困りごとを抱えていることから、保護者の悩みや不安を聞き、継続的なフォローをする保護者支援の力も不可欠であることが明らかに

なった。食に関する継続的な保護者支援が必要であると考え。

栄養士の特徴として、調理室内についての発言があり、これは他の職種にはみられなかった。調理室内の栄養士や調理師、パートなど様々な人物が調理に関わっており、栄養士にとって人間関係づくりも必要な力であると認識していた。調理室は基本的には栄養士が責任者として統括しており、調理師やパートなどの人々の想いや作業分担などを行わなければならない。また、区との栄養士と連携をすることもあげられ、特に一人職種である栄養士は衛生面や栄養面で市町村の栄養士と連携をとることも必要な能力として明らかになった。他にも、栄養士からは保育所保育指針や幼児教育への理解に関する発言があった一方で、幼児教育の知識や経験が足りないことを認識している発言もあった。栄養士は子ども理解を促すような学びが第一に基盤として大切だと認識する力も必要であると考え。

保育士、栄養士は現場での現状や食への想いが抽出された。保育士では、保育や子どもとの関わりについて多くの発言があった。栄養士では、子どものみならず調理についての発言も多かった。保育士、栄養士それぞれの専門性を抽出することができたと考えられる。互いの専門性を保育で展開し、連携している姿もみられた。しかし、栄養士からは保育士と「連携が難しいと感じている」と発言もあり、連携の課題もみられた。今後、保育士、栄養士の連携に関して検討していく必要性も示唆された。

#### 4. まとめ

研究Ⅰと研究Ⅱを通して、保護者と保育者の「子どもの食を支える力」がそれぞれ明らかとなった。家庭と保育所は食を通した活動によってつながり、連携していた。本研究の限界点として、対象者の人数に偏りがあったことや、グループのメンバーが必ずしも職種別に分かれていなかったことなどがあげられる。今後、この結果をもとに量的調査を行い、実践現場で活用できる保護者や保育者のセルフチェックリスト開発につなげたい。